

大阪ろうさい クロニクル

第9号

発行日
2024.7.1

認知症と難聴の関係 — 低侵襲な内視鏡を使用した耳の手術 —

副院長/耳鼻咽喉科・頭頸部外科部長 にし いけ すえ たか
西 池 季 隆



炎暑の候、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、認知症と難聴の関係を皆さんはご存じでしょうか。認知症の35%は予防可能とされています(Lancet 2017)。その認知症の予防可能な危険因子は、小児期では教育不足、中年期では難聴、高血圧、肥満、老年期では喫煙、うつ、運動不足、孤立、糖尿病です(表1)。その中でも難聴は危険因子の9.1%を占めており、これらの中では認知症に最大の影響を持っているのです。このことから、難聴の予防、対応および治療が注目を集めるようになりました。我々は医療で改善可能な難聴に対しては、内科的加療や手術的加療で尽力していきたいと考えています。

2022年に「経外耳道的内視鏡下鼓室形成術」が厚生労働省に認められ保険請求できるようになりました。この手術は内視鏡を使用して耳の穴から慢性中耳炎等の耳の病気を手術する方法であり、低侵襲かつ詳細な観察や繊細な操作が可能となる手術です。我々は2012年からこの手術を全国に先駆けておこなっています(図1)。その累計件数は1,000件を越えており、日本を代表する内視鏡下耳科手術センターです。遠方の他府県からのご紹介もいただいています。ようやくこの手術が保険請求できるようになったことからさらに普及し、患者さまの利益が増えることをうれしく思っています。我々はますますこの術式を多くの患者さまに届けたいと考えています。

我々は、副鼻腔炎に対する手術では、全例ナビゲーションシステムを導入しており、安全で精密な手術を可能としています。頭頸部がんに対する手術適応に関しては、患者ごとに適応を厳密に決定し、安全かつ低侵襲な手術治療を提供しています。我々は今後も皆様に最善の医療をお届けできるよう尽力して参りますので、皆様方には引き続きご指導ご鞭撻お願い申し上げます。



図1. 内視鏡下耳科手術の手術風景

表1 認知症の予防可能な危険因子(Lancet 2017を改変)

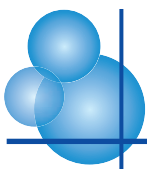
危険因子	寄与度	危険因子	寄与度
小児期		老年期	
教育不足	7.5%	喫煙	5.5%
		うつ	4.0%
中年期		運動不足	2.6%
難聴	9.1%	孤立	2.6%
高血圧	2.0%	糖尿病	1.2%
肥満	0.8%		

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1. 地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2. 高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3. 患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4. 勤労者医療を担ってこれを推進します
5. 働きがいのある職場づくりを推進します



診療科紹介 外科・消化器内科(上部)

外科・消化器外科部長 あか まる ゆう すけ
赤丸祐介



上部消化管外科グループは、主に食道・胃・十二指腸の疾患を担当するグループで、胃がん、食道がんの外科手術および抗がん剤治療を中心に診療を行っています。

【胃がん】

胃がんはヘリコバクターピロリ菌の感染率の低下に伴い発生率も減少傾向にはありますが、依然として頻度の高いがんです。治療は手術と抗がん剤治療の2つの柱で行なわれています。

当科では、年間80例以上の切除術を施行しています(図1)。また、ほとんどの手術を腹腔鏡またはロボット支援の低侵襲手術で実施しており、根治性を維持しながら患者さんに負担の少ない手術を提供しています。切除不能進行や再発した胃がんは予後が不良ですが、新しい抗がん剤(免疫チェックポイント阻害薬など)の登場により、治療成績は飛躍的に改善しています。さらに手術と抗がん剤を組み合わせることにより、さらなる成績向上を目指しています。

【食道がん】

食道がんは日本では扁平上皮癌がほとんどであり、飲酒、喫煙が発生に深く関与していることが知られています。当科では、食道がん切除術は年々増加しています(図2)。食道がん手術は、消化器外科領域で最も侵襲の大きな手術の1つですが、胸腔鏡による低侵襲手術を導入しており、安定した成績を修めています。Stage II、IIIの切除可能進行食道癌に対しては化学療法後の根治手術が標準治療となっています。また切除不能進行食道がんに対しても免疫チェックポイント阻害薬を併用した化学療法が適応となり、劇的な効果が得られる患者さまも多くなります。

上部消化管外科グループは、赤丸、浜川、西田の3人で担当しています。胃がん、食道がん治療の最後の砦として、最後まであきらめない集学的治療を実践しています。引き続きご支援をよろしくお願い申し上げます。

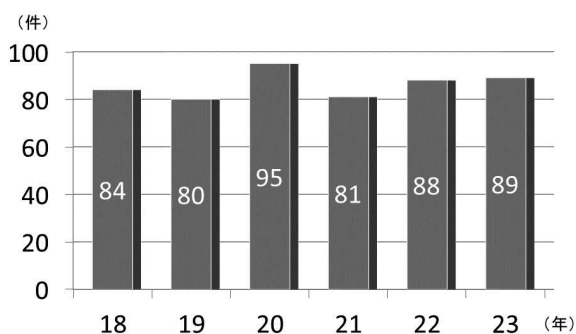


図1. 胃がんの切除症例数

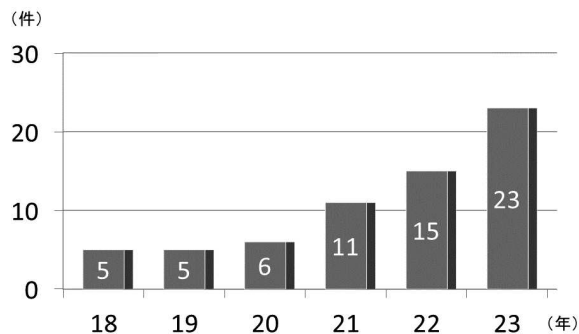


図2. 食道がんの切除症例数



上部消化管外科医師(左から、西田、赤丸、浜川)

診療科紹介 外科・消化器外科(下部)

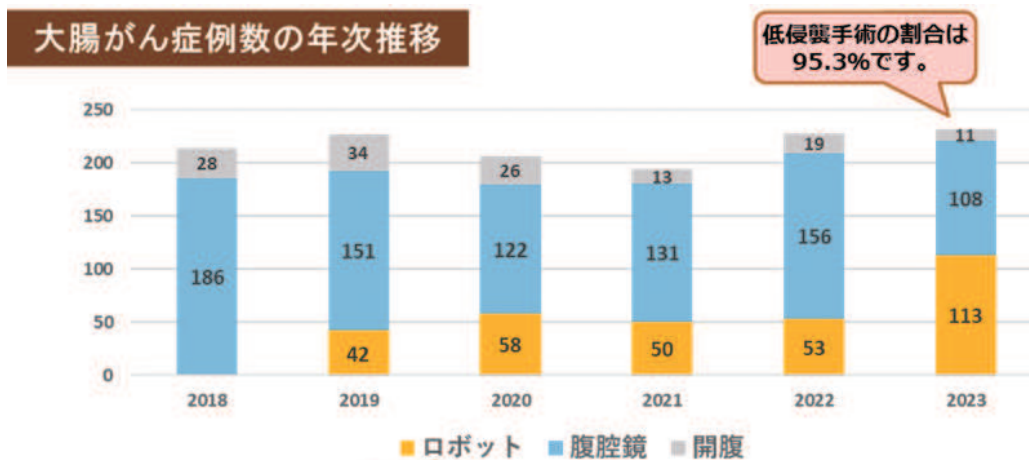
下部消化管外科部長 鄭 充 善



下部消化管外科グループは、スタッフ5名で構成され、月曜日から金曜日まで毎日スタッフが外来診療を行っており、日本内視鏡外科学会技術認定医4名、日本内視鏡外科学会ロボット支援手術認定プロクター1名、da Vinciサージカルシステム認定医4名で手術を担当しています。昨年約350件の手術(悪性腫瘍手術は235件)を施行し、大腸がんにおける低侵襲手術(腹腔鏡手術・ロボット手術)の割合は95.3%でした。また、ロボット支援下手術も累計350例に到達し、南大阪エリアでの有数の手術件数となっております。

外科領域における技術革新の進歩は目覚ましく、今後はAI・高速通信技術などの次世代テクノロジーと相まって、より個別化が進んだ外科治療となっていきます。一方で、がんと診断されてから治療を受けるまでの期間は患者さんにとってつらい時間です。当科では原則2週間以内の手術を目指して診断・治療体制を確立しています(昨年初診日から入院までの期間は平均11.5日でした)。

患者さまにとって「より優しい外科治療」を「できるだけ早く」に導入できるよう、これからも努力してまいります。引き続き大阪ろうさい病院下部消化管外科を宜しくお願い致します。



2019年にロボット手術を導入し、2019年から2023年までの間に累計316例施行しました。

スタッフ紹介

月曜日



鄭 充善
部長

火曜日



野村 雅俊
医員

水曜日



玉井 皓己
副部長

木曜日

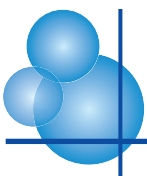


吉川 幸宏
医員

金曜日



辻村 直人
医員



診療科紹介 肝胆膵外科

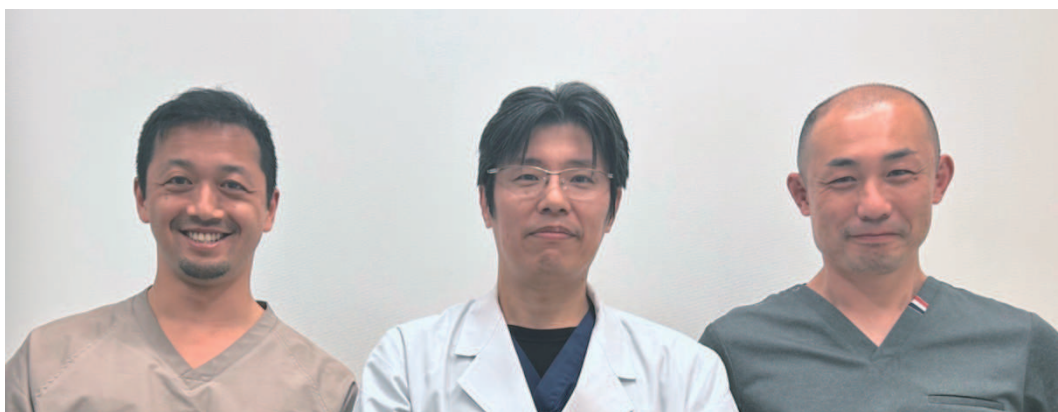
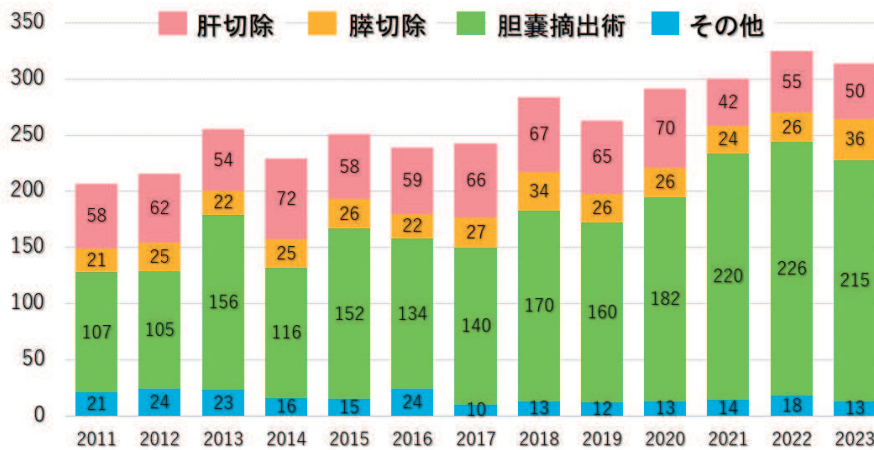
肝胆膵外科部長

つじ え まさ のり
辻 江 正 徳



肝胆膵外科グループでは、3名の専門スタッフ(辻江、瀧内、森)が肝臓、膵臓、胆道(胆嚢や胆管)の疾患に対する手術を担当しています。肝がん、膵がん、胆道がんなどの悪性疾患に対する手術はもちろんのこと、良性疾患(胆嚢結石症・胆嚢ポリープ・急性胆嚢炎など)に対する手術も行っており、年間250件を超える予定手術と約50件の緊急手術を担当しています。高難度手術(大量肝切除術や膵頭十二指腸切除術など)も数多く行っており、日本肝胆膵外科学会から肝胆膵高度技能専門医修練施設に認定されています。また、安全性に十分配慮しながら、体への負担の少ない腹腔鏡下手術も積極的に行っており、肝切除では約6割の症例で腹腔鏡下手術を施行しています。さらに昨年10月から肝がんに対してロボット支援下手術を導入し、低侵襲かつ高精度で精密な手術を行えるようになりました。今後、膵がんに対しても導入予定です。肝胆膵領域のがんは、手術だけでは完治できない進行がん・難治がんが多く、そのような症例に対しては手術、薬物療法(抗がん剤・分子標的治療薬・免疫チェックポイント阻害剤など)、放射線療法を組み合わせた治療(集学的治療)が必要になります。肝胆膵グループでは外科・消化器内科・放射線科の専門スタッフが毎週、合同カンファレンス(カンサーボード)を行い、治療困難な進行がんに対しても、個々の症例で最良な治療を実施できる体制を整えています。今後も地域で信頼されるよう、一人ひとりの患者さまに丁寧な説明と最適かつ安心・安全な治療を提供できるよう努めてまいりますので、引き続き宜しくお願い申し上げます。

肝胆膵外科グループの年間手術件数



森 総一郎

辻江 正徳

瀧内 大輔

診療科紹介 乳 腺 外 科

乳腺外科部長 がんゲノムセンター長

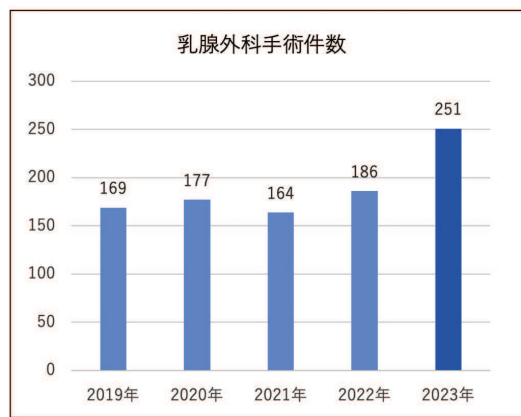
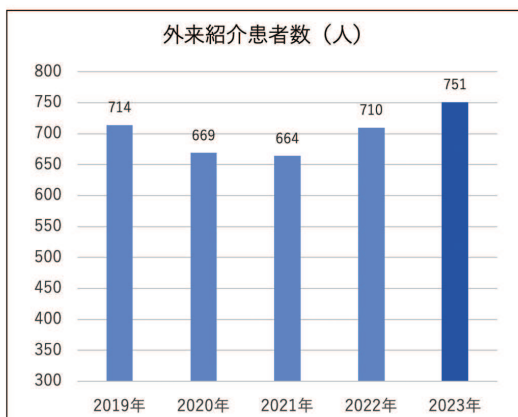
きっ たか のぶ よし
橘 高 信 義

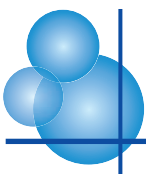


近年の乳癌診療における診断・治療の進歩及び乳癌の遺伝・生物学の解明にはめざましいものがあります。特に、乳がん患者数の増加や遺伝性乳癌に対する社会的関心の高まりから、乳癌診療においては個々の癌のbiological featureを踏まえた診断・治療法の選択が求められ、高度の専門性が必要となってきております。当院は南大阪地域でも有数の症例数を誇る乳癌診療施設であり、昨年は年間約250例の乳腺手術を施行いたしました。国指定のがん診療連携拠点病院である当院では、最新の診断及び治療設備を備えており、放射線科や腫瘍内科等の他科診療部門とも綿密な連携をはかり、今後も精度の高い集学的医療を提供していきたいと考えております。

当院は日本乳癌学会認定研修施設にも登録されており、症例数の増加とも相まって、現在はスタッフを4名まで増員し、日々の診療に当たっております。とくに若手の医師には、治療の根幹を成す医学的evidence、academicな側面にも視野を広げていただくため、JBCRG, WJOGなどの各種臨床試験への参加も積極的に行っており、今後の乳癌治療への貢献だけにとどまらず、よりベーシックな視点から日常診療にも取り組める若手医師の育成にも力を注ぎたいと考えております。

また、近年はがんゲノム医療という個々のがんの遺伝子情報をもとにしたprecision medicineが臨床に普及してきております。当院は大阪大学医学部附属病院を中核とするがんゲノム医療の連携病院にも指定されており、積極的に遺伝子パネル検査を施行しております。遺伝子異常に応じたmatched therapyへの到達率やエキスパートパネルへの負荷といった改善すべき課題は複数あるものの、がん診療におけるゲノム医療の重要性は今後ますます高まるものと考えられます。





診療科紹介 産婦人科・西4階病棟

産婦人科部長 志岐保彦



昨今の分娩を取り巻く状況は一段と厳しさを増してきています。先日、厚生労働省から発表された令和5年の本邦の出生数は72万人と、前年比で5.6%減少し、期間合計特殊出生率は1.20、特に大都市圏では低下が顕著で、東京では0.99と1を割り、韓国の0.76が他人事のような気がなくなってきました。大阪でも毎年出生数は5%ずつ減少しており、タワーマンションが林立する北区・西区以外の減少が顕著となっています。堺市でも私が赴任した2001年と比較すると出生数は約半減しており、産科医療を継続的な事業とするにはさまざまな工夫が必要な時代になってきたと考えています。当院でも分娩数は減少の一途をたどっていましたが、令和4年1月の病院移転を機に140を切っていた分娩数が昨年度は158件と増加に転じ、今年は5月までで昨年のおよ半数の分娩数に達し、継続的に増加傾向となっています。手術室は帝王切開目的の部屋が基本的に1室確保されており、また手術部の協力で超緊急の帝王切開術にもスムーズに対応できるよう物品も常時準備された状態でスタンバイされるようになり、より安全に分娩を行っていただける施設として進化しています。婦人科診療と異なり、個室である病室や分娩室がきれいで快適である、食事が若い世代にも魅力がある等、医療以外での妊婦さんへのアピールに占める要素が非常に多いのが産科の特徴でもあります。以前から取り組んでいる助産師外来や助産師主導の分娩等、看護部との協力体制を密にしながら魅力ある分娩施設へ向けて取り組みを続けていますので、近隣の先生方からもより安心してご紹介いただける施設であることと確信しています。また、医療の面では大阪府の産婦人科診療相互援助システム(OGCS)の加盟病院として、府内からの産婦人科搬送依頼の受け入れに協力し、単施設以上に安全な分娩を提供すべく継続的に努力を続けています。

女性の社会進出が進んだ今日、良性疾患から悪性腫瘍に至るまで幅広い術式を鏡視下に行い、早期の社会復帰の実現に向けたサポートとなるべく婦人科でも治療を展開しています。現在、当科では日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医が4名、また日本婦人科腫瘍学会腫瘍専門医も3名在籍しており、悪性腫瘍の治療も積極的に行っているのが特徴です。当科では早期の子宮体癌および子宮頸癌に対する手術はほぼ鏡視下に行っており、予後も含め、高い治療成績を継続しています。また、子宮頸癌に対する腹腔鏡下手術では全国の前向き研究での数少ない参加施設となっており、その術式は国内外の学会から高い評価を得ています(図1)。さらに、堺市では唯一子宮鏡手術が可能な施設となっており、より低侵襲な手術を提供すべく努力を続けています。

子宮頸癌ワクチンでは、当科の田中副部長が推奨再開への提言を英文誌へ掲載し、厚労省による推奨再開に寄与しました(図2)。再開後、多数の中高生のワクチン接種が進んでおり、将来にわたる子宮頸癌症例の減少が期待されます。

現在多数の患者様を地域の先生方よりご紹介いただき、当科の活動が維持できていることを深く感謝しています。少ないスタッフながら、安全で質の高い手術を今後も提供していきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願いたします。



図1 アジアパシフィック産婦人科内視鏡学会 ベストビデオ賞(2023年10月)

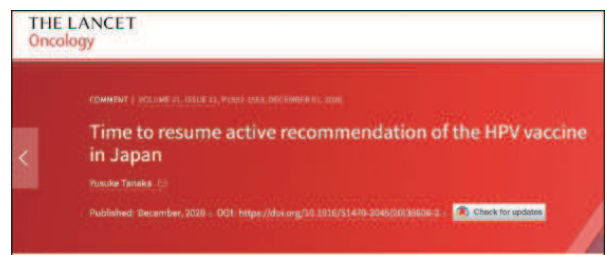


図2 子宮頸癌ワクチン推奨への提言

安全で良質な“お産”の提供 ～選ばれる産科を目指して～

西4階病棟 師長 つる 鶴 田 さち 子



2022年1月に新病院へ移転し、分娩件数が増加することを期待しましたが、大幅な件数増加に結び付きませんでした。そこで昨年、プロジェクトチームを発足し、分娩件数増加に向けて取り組みを行いました。我が国の少子化が進む中、厳しい課題に医師を含め「産婦やその家族が望むお産」、「安全で良質なお産」とは何か徹底的に話し合いました。そして、サービス面と広報活動の見直しに取り組んでいきました。

まず、サービス面の充実としては、分娩から産後まで過ごすLDRをよりリラックスできる環境とするためプロジェクターを購入し、波の音や鳥のさえずりなどの音響も流せるようにしました。リラックスはお産の要となり、安全で安楽なお産を実現するために必要なサポートの一つとなります。その他、ホテルのアメニティを参考にプレゼント内容の変更や、退院時のプレゼントとしていたベビーブランケットをより実用的なものとししました。また、食事面では産後の“祝い膳”に加え、ご家族お二人様に病院内にある食堂へご招待しました。

さらに、広報活動としては、地域の商業施設の一部をお借りして「お産フェア」を開催し、地域の方と触れ合いながら大阪ろうさい病院での出産を紹介しました。また、産婦人科のパンフレットをリニューアルし、病院職員や近隣の産婦人科クリニックへ医師とともに訪問しました。

現在、これらの取り組みを継続しつつ、その結果を楽しみに待っている段階です。チームで同じ目的を意識することは、大きな力となり希望に結びつくことだと感じました。何より助産師が助産の楽しさを再度感じる良い機会となりました。他部門の方々にもたくさん協力いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。めざせ年間200件を合言葉に今後もチーム一丸となって頑張ります。

アメニティ



LDR室の様子

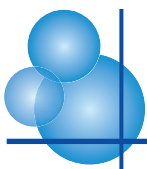
祝い膳



ニューボーンフォト



パンフレット



部門紹介 きめ細やかな助産師外来

西4階病棟 師長 つる た さち こ
鶴 田 幸 子



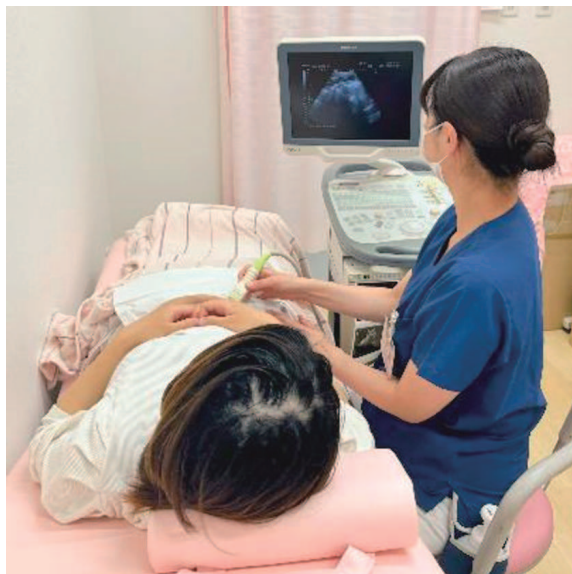
当院では、アドバンス助産師が妊婦健診を行う『助産師外来』を行っています。

通常の妊婦健診は医師が担当しますが、正常経過をたどる妊婦健診や保健相談は、助産師の判断で行うことができます。アドバンス助産師とは「標準的な助産ケアを自律して提供できる能力を客観的に評価された専門家」であり、日本助産評価機構の基準によって認定された助産師を指します。2024年5月現在、近隣病院の中ではアドバンス助産師が10名と多く在籍しています。

当院の助産師外来は、1人1時間枠を確保しています。待ち時間も少なく、充実した保健指導を受けることができます。助産師は、妊婦とその家族の意向を尊重しながら、ひとりひとりに合ったアドバイスやサポートを心がけています。助産師外来のもうひとつのおすすめは、骨盤ケアをはじめとした体づくりを大切にしています。妊婦の身体の状態や生活にも耳を傾け、妊婦の力が最大限発揮できるように支援しています。さらに、助産師外来では毎回エコーで胎児の様子を見ながら、妊婦と児の成長を共有しています。これは、児の成長確認だけでなく、母性性の形成、発達にも役立っています。

助産師外来は、病棟助産師が担当しています。妊娠期から顔見知りとなった助産師が分娩時に病棟でお迎えすることで、産婦の安心にもつながっています。継続した関わりで、妊婦自身が自分らしく、妊娠・分娩・産褥期を過ごせるように伴走者として関わっています。そして、妊婦とその家族と共にバースプランを計画し、その実現に向けてサポートしています。また、安全で安心できるマタニティライフを過ごせるように、医師とも連携しています。

きめ細やかなサポートができる助産師外来を目指し、助産師は日々、自己研鑽しながらお待ちしております。



エコーの様子



独立行政法人
労働者健康安全機構 **大阪ろうさい病院**
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曾根町1179-3
TEL 072-252-3561(代表)
072-255-8076(メディカルサポートセンター)
FAX 072-255-8203(メディカルサポートセンター)
<https://www.osakah.johas.go.jp/>



(病院HP)